川崎巨泉筆

起上小法師畫集

本戸達磨堂藏版

第五集

第十三圖

(一)より(九)に至る　大阪の達磨（張子製）　第三集第八圖に印刷洩の分を此圖に收む。(一)(二)(五)(六)(七)は當今市中に見受けずなれり。(一)(二)の如きは名古屋達磨の先輩なるべきも、其腹中砂なきを異りとす。(三)(四)は現今にても需用最多き種類に屬す。扁平なる頭上に黃金を戴けると然らざるとあり。前面には共に雪中松の變形模樣を染出せり。大阪はもとより近畿四國中國迄も分布し、專ら冬より春へかけて活動す。(八)は昆布達磨と稱するものにして、節分の日、家内の人數だけを買ひ、昆布を卷きて神棚に祀り、翌年之を川に流す風習今も花柳界に殘れり。昆布を卷くは風邪をひかぬ呪なりとも云ふ。(九)は昨年より作り始めしものにて、濱松以西に於ける唯一最初の目無達磨なり。大乘坊琵沙門天入口にて賣出せるが、目無は大阪人の好尙に適せざるにや、緣起物として未だ容易に流行を見るに至らざるが如し。いづれも實物大なり。

第十四圖

(一)(二)(三)　松本の達磨（張子製）　いづれも目無達磨にして、毎年一月十日本町の初市に賣り出さる。此市は武田信玄嘗て敵上杉方に鹽を供給せしに始まり、鹽市の名ありしが、後飴市と呼ばれ、近來酸いもの迄も賣る樣になりてや、初市と通稱せらるゝに至れり。客は主に養蠶家にて、片目を入れて神棚に祀り、お子樣（蠶のこと）の出來長ければ他眼にも点睛す。大形のものは眉と鬚とに短き本毛を用ひ剃跡を無雜作に靑く塗れり。前面には墨にて大當厄除などの文字を書き、又は寶珠を描く。衣裳は金色にて現はせるが、左右より中央に向ひて線を引き往々尖端の交叉せるなどを其特徵とす。豐岡達磨（第一圖參照）も初市に現はれ、當地產を凌駕せんとする傾向あり。

(四)(五)　長野の達磨（張子製）　毎年十一月二十日の惠比須神緣日又は一月二日初買の時に求む。其風俗松本に同じ。製法極めて粗末なれども、却て土俗的趣味に富む。十數年前より製造し始めしが、豐岡達磨に壓倒せられ、微々として振はず。此圖に示せる内、(一)(二)は實物の四分の三、(三)(四)(五)は實物より稍小なり。

第十五圖

(一)(二)(三)　高知の女達磨（張子製）　年中市内の玩具店頭に人目を惹けるが、歲暮より年頭へかけて賣行よく、節分の日には一年中臥ぬ樣にとの呪に買はれ、婚禮の場合には一生小遣錢に困らぬ樣にとて花嫁への進物となり、還曆の祝物に用ひられ、或は火事除の呪として神棚に祀らるゝ等其用途甚廣し。山内容堂侯在世の頃御抱えのデコ師が作り始めしものなりと云へるが、土佐は古來紙の本場として知られ、紙製工業奬勵せられ、人形を作るにも張子製多く、殊に女形のもの多かりしより、達磨も女と生まれ出しならん。さるにても尙武の氣風に富める高知としては不可思議の事どもなるが、其燗斬たる容姿は、之を飾るに濃艶なる服裝を以てし、實に世界第一の美人達磨たるに耻ぢざるなり。

(四)(五)　松山の起上り（張子製）　(五)は武内宿禰の擁げる胎中天皇（應神天皇の幼時）の形に擬へしものなり。一見女形の如きも、實は男性にして起上りと通稱せらる。昔は男兒もオケシに髮を垂らしたれば、其樣を人形に寫せるなり。顏のみはねり物にて、張子全體の出來上りたる後之れを嵌め込む。他に類なき製法なり。かくれ簑とかくれ笠とを描き、之に配するに銀色の寶珠を以てす。毎年舊十一月初子の日道後湯神社初子祭の市に始めて賣り出され、それより春へかけて市中の玩具店頭に並ぶ。運の神樣として祀らる。(四)は第十三圖(三)(四)大阪の小達磨に類せるが、稍其形を異にす。初子祭の頃より賣出され、道後八幡社春の緣日に最盛なり。今治までは此起上りの繩張内にて、それより東にては大阪製に驅逐せらる。此圖に示せるは、(一)は實物の四分の三、他は實物大なり。

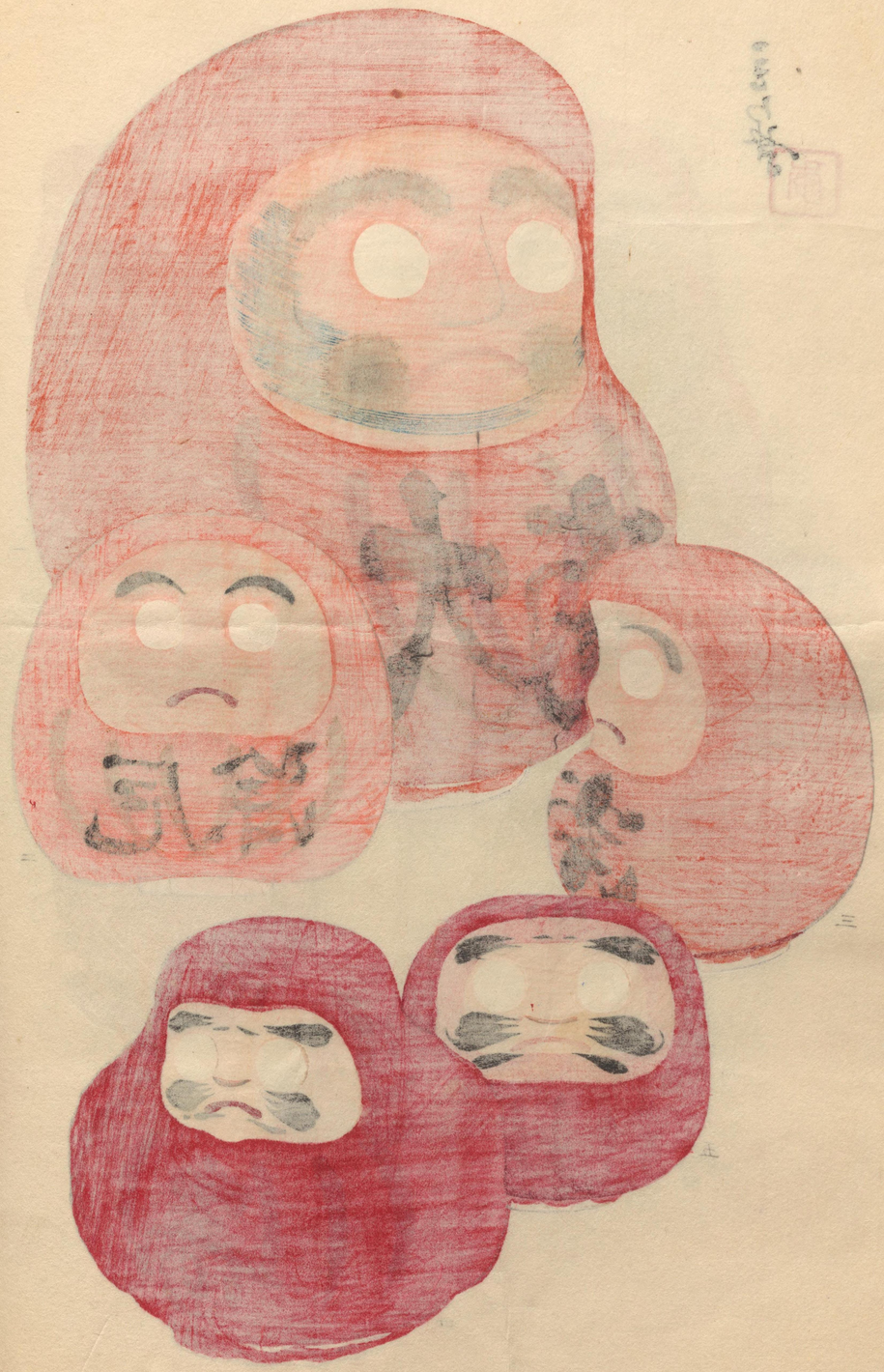
大正十三年九月

木戸忠太郎記

大正 13.10.9 内交

第十三圖

除厄
壽



ウチダカンスケ版ゾ印ロ製彫・ウチ二ロ製彫

發行所　京都市上京區下立売通堀川西入

著作兼發行者　木村唯次郎

京都市上京區寺町通今出川上ル

印刷人　木村唯次郎

京都市上京區寺町通今出川上ル

發行人　木村唯次郎

大正十三年十月一日印刷

大正十三年十月一日發行

藤井